

流転三界中（我が思いにずっと迷って来たけれど）

恩愛不能断（我が思いを断ち切る事など出来ない）

棄恩入無為（しかしこの迷いのまま呼んで下さる念仏に全てを任せ応えると）

眞実報恩者（初めて気付く、この果報者よ）

（『清信士度人経』四分律行事鈔・卷下四）

※（ ）内は筆者訳

## 報恩（眞の喜び）

第4組 生振寺住職

白山 敏秀

text by Toshihide Shirayama

報恩講もクライマックスを迎えると、各法要の頭に冠せられるのは「結願」という言葉である。願いが結ばれたということで、いわゆる願いが届いたということである。もちろんそれは仏に手を合わせる毎に「あなたは何をお願いした？」などと誤解されるような方向違いではない。私の思いが如来に届くような凡夫の思いの沙汰ではなく、如来の願いが私に届いて、親鸞聖人にお会いしたいという心になさしめてみんながここに座っている。私たちは呼ばれて応えるいのちを生きていたのだと気づく場なのだ。

若いとき父の住職に報恩講の意味を問うたことがある。「親鸞聖人に頂いた御恩に感謝する集まりだ」その答えにかなり長い間頷くことが出来なかった。「御恩など少しも貰った覚えはない」私はずっと抜けられぬ「我が思い」に座り続けた。

御恩に報いるということは人知の理屈ではない。報わずにおれない、それだけ深く重い底無しの喜びの自覚の表現である。それ故に興った、親鸞聖人にお会い出来た喜び、そして増々お会いしたいと願う法要なのである。それは親鸞聖人という人格を懐かしむというより、聖人の九十年にまでなって表現された本願の念仏にその場の一人一人が自身の人生の只中に遇い得て、今の今、この瞬間に、自我崩壊する。迷いの私に眞の願いが顔を出す、目が覚めるような生き生きとした眞の喜びの確かめの時。「人身受け難し今すでに受く、仏法聞き難し今すでに聞く」と誕生する瞬間なのである。

私事ではあるが、高校時代、私は単車が好きだった。高校三年の春、念願の単車通学が許されて、私はなけなしの小遣いで何とか免許は取得したが、貧乏寺の事、親に単車を買ってくれとは、口が裂けても言い出せなかった。そんな私に父は背中から、「単車も見に行くか」と。その単車屋で、お気に入りの中古の単車から動けなくなった私に背中から、「それにするか」と。数日後、家の玄関先に届けられた件の中古の単車は、どういうわけか、輝く新車の単車だった。親の願いは我が思いを壊し、はるかに凌駕して、私を包み震わせ続けた。数十年経って、今私に残っているのは、我が思いが打ち壊れた感動の喜びである。

念仏のいのちの願いは決して私の思いを叶えるようなものではない。我が人生のただ中に、我が思いを壊し続け、真の喜びの世界を開き続けるのである。

正信偈の文に「証歡喜地生安樂」（念仏に遇い得た喜びを以って浄土に生まれる）とある。華嚴經に菩薩の五十二位ということがあって、凡夫が仏を目指して歩みの境地を確かめていくのであるが、四十一段目から菩薩の位になる（十地）。念仏に遇い得た念仏者を物語るのだと思われるが、その初地を歡喜地という。念仏に会うまで私どもは世間的にどんなに上等になっても、ずっと真の喜びを知らない者なのかもしれない。偽りの喜びを抱えて迷って来た。そのことが念仏の光を浴びて真の歡喜の舞台となる。

聖人晩年の弟子「唯円」は、聖人の御傍で、聖人の本願念仏に遇い得た真の喜びの人生を間近に見られた。その人生はどこを切っても歡喜に満ち満ちた仏道であった。聖人の歡喜の言葉は唯円の耳底に、また歎異抄として残された。歎異という究極の素直さこそ真の喜び（報恩）であった。

真の野菜作りで町興しをした宮崎県綾町の元町長の言葉に、「真とは騙さないこと、裏切らないこと」とある。聖人は師法然上人に念仏の真の喜び（報恩）を賜り、裏切らない人生を生きた。そして私の中に生まれて私を決して裏切らない。

一人いて喜ばば二人と思うべし。二人いて喜ばば三人と思うべし。その一人は親鸞なり。（『御臨末の御書』・親鸞聖人の遺言）。聖人の九十年の人生を生き抜いた南無阿弥陀仏のいのちが私とともにある。私の百年足らずの人生を生き生きと往生しようとして…。